International Theatre Institute ITI
World Organization for the Performing Arts

インターナショナル・ダンス・デイ 2022 メッセージ

姜（カン） 秀珍（スジン）（韓国）
バレエダンサー・韓国国立バレエ団芸術監督

COVID-19 という災禍は、私たちが慣れ親しんだ自由な生活を奪い去りました。この悲劇の中にいると、「ダンス」や「ダンサー」の意味について問い直しを促されます。遠い昔、ダンスは身振り手振りでコミュニケーションする原始的な手段でした。それが観客の心を揺さぶり感動させるパフォーマンスアートへと発展したのです。ダンスは全身全霊を賭けるため、一度上演した同じ動きを繰り返すのが難しい、うたかたの芸術です。それは、はかない瞬間の集積であり、そしてダンサーは永遠に踊りつづける運命にあります。しかし COVID-19 は、そうしたダンスの本性を押さえつけ、行く手をさえぎったのです。

現在、状況は改善しつつあるとはいえ、ダンス公演はまだ多くの制約を受けています。だからこそ、人間の苦悩や不安、生きる意志や希望を伝えるために、ダンスとダンサーが宝石のように輝き世界を照らしていた頃の貴重な記憶を大切にしたいのです。

中世ヨーロッパで流行したペストをモチーフにさまざまな作品が生まれましたが、1841 年 6 月 28 日、死を超える愛を描くバレエ『ジゼル』がパリ・オペラ座で上演され、爆発的な反響を呼んだことを思い起こすことも大事でしょう。以来、『ジゼル』はヨーロッパ全土はもとより、世界中で上演され、パンデミックに苦しめられる人類の心を慰め、励ましてきました。そして、世界の苦しみという重力から逃れようとするバレリーナの偉大な精神が、まさにその『ジゼル』の上演で初めて示されたと私は理解しています。

孤独で疲れた観客は、ダンサーとの共感や慰めを渇望しています。私たちダンサーは、自らの翼を羽ばたかせることで、ダンスという芸術を愛する人々の心に、希望とパンデミックを乗り越える勇気とを与えられると信じています。

今から胸の高鳴りをおさえられません。

姜 秀珍

翻訳：荻野哲矢
Translation: Ogino Tetsuya

公益社団法人 国際演劇協会 日本センター
Japanese Centre of International Theatre Institute